

# 英語における再帰代名詞の出没

時 崎 久 夫

## 1. はじめに

英語では、再帰代名詞が現れる文で、再帰代名詞が現れなくても意味がほとんど変わらないことがある。

- (1) a. He has to shave himself twice a day.  
b. He has to shave twice a day. (Quirk et al. 1985: 358)

(1b) は (1a) の再帰代名詞が省略された文と考えることができる。以下ではこのような再帰代名詞が出没するいくつかの構文について考察する。\*

## 2. 再帰代名詞の出没

Quirk et al. (1985: 357f) は、動詞を再帰性という点から、再帰的 (reflexive)、準再帰的 (semi-reflexive)、非再帰的 (non-reflexive) の 3 つに分類している。次の a, b, c がそれぞれの例である。

- (2) a. She always prides \*(herself) on her academic background.  
b. Behave (yourself)!.  
c. Williams publicly blamed himself for the accident.

ここでいう再帰動詞とは常に再帰代名詞を必要とする動詞であり、準再帰動詞は再帰代名詞が意味を変えることなく省略できる動詞である。これらに対して非再帰動詞は特に再帰代名詞を要求しない動詞であり、次のように代名詞も現

れることができる。

- (3) Nobody blamed him for the accident.

Quirk et al. (1985: 358) は、(2) の他に、次のような動詞をそれぞれの類に属するものとして挙げている。

- (4) a. absent, avail, demean, ingratiate, perjure  
b. adjust to, dress, hide, identify with, prepare for, prove to be, wash, worry  
c. accuse, admire, amuse, dislike, feed, get, hurt, persuade

しかし、この分類には疑問が残る。例えば、(2a) の再帰動詞の *pride* 同様、(2b) の準再帰動詞の *behave* は確かに再帰代名詞以外の目的語をとらない。しかし同じく準再帰動詞とされる (1b) の *shave* 及び (4b) の動詞は再帰代名詞以外の目的語をとれる。

- (5) a. \*She always prides her son.  
b. \*Behave your children!
- (6) a. We have to hide sharp things from babies.  
b. These children worries me with perpetual hows and whys.

よって、動詞の分類としては2つの視点を明確に区別するべきである。1つは再帰代名詞以外の目的語をとれるかどうか、そしてもう1つは再帰代名詞が現れる場合にそれを省略できるかどうかである。1つめの基準では、(2a) の *pride*、(2b) の *behave* 及び (4a) の動詞は再帰代名詞以外の目的語をとれない、常に再帰的である動詞となり、再帰代名詞以外の目的語をとれる (4b) と (4c) の動詞と区別される。その意味では前者のみを再帰動詞 (*reflexive verb*) とし、後者は単に動詞の再帰的用法と呼ぶべきである。またもう1つの基準では、再帰代名詞を省略できないという点で、(2a) の *pride* と (4a) の動詞、それに (2c) の *blame* と (4c) の動詞が類を成す。そして再帰代名詞が省略できる (2b) の

behave は今度は (1b) の shave 及び (4c) の動詞と類を成すことになる。ここでは前者を義務的再帰動詞 (obligatory reflexive verb)、後者を随意的再帰動詞 (optional reflexive verb) と呼ぶことにしよう。

以上のことを表にまとめると次のようになるだろう。

(7)	再帰代名詞省略不可	再帰代名詞省略可
再帰代名詞以外の目的語不可	(A) pride, absent, ...	(B) behave
再帰代名詞以外の目的語可	(C) blame, accuse, ...	(D) shave, dress, wash, ...

以下では、再帰代名詞の出没を許す、(B) と (D) のタイプについて考察する。

### 3. 動作主が主語の場合

まずこれらの動詞で動作主 (agent) を主語としてとるものを考えてみよう。『ジーニアス英和辞典(改訂版)』(大修館書店)の用例を再帰代名詞の意味によって大まかに分けて示すことにする。まず体に関するものを(8)にまとめて示す。

- (8) a. Wash (yourself) before you eat.  
 b. Dress (yourself) quickly in black.  
 c. She titivates (herself).

これらは(裸の)体を洗ったり、それに服を着せたりするものであり、これには(1)のshave、その他にはbake, strip, vestなどが入るだろう。次は体の中身とも言うべきものである。

- (9) a. Take care (of yourself) !  
 b. He refreshed (himself) with a shot of whiskey.

この類には (3) の behave や overwork を入れることができる。3 番目は体そのものを表す場合である。

- (10) a. We surrendered (ourselves) to sleep.  
b. He stretched (himself) out on the grass and soon fell asleep.  
c. The boy wedged (himself) into the crowded bus.  
d. Sit (yourself) down beside me.

4 番目には心・精神を表すと考えられるグループがある。

- (11) a. Don't bother (yourself/your head) about it  
b. Don't fret (yourself) about the exam.  
c. Don't strain (yourself).  
d. Don't worry (yourself) about what she says.

これには他に agonize, reform が入るだろう。そして最後に自分、我という日本語に当たるものがある。

- (12) a. I can't see (myself) giving a present to him.  
b. Try to visualize (yourself) living on the moon.  
c. When he came to (himself), he was lying on the sofa.  
d. It is important for you to secure (yourself) a stable job.

この他には assimilate to, register, stop などに入れられるであろう。

さてこれらの再帰代名詞の出没例を実際の言語データからひろってみよう ([ ] は筆者)。

- (13) a. Surely it [hair] would grow there [on my face] whether I  
washed myself or not. (Brown Corpus: K08 1610 6)
- b. He flexed his muscles for several minutes, got into the tub,  
and then grew self-conscious of splashing as he washed.  
(Brown Corpus: N19 1100 3)

例は多くないが、以上からも、実際にも再帰代名詞が出没することがわかる。

以上、英語ではかなりの数の動詞で再帰代名詞が目的語として出沒することを見た。ここではこの現象を次のように表すことにしたい。

- (14) John washed *refl*/himself.

すなわち、英語では再帰代名詞が音形を持たずに現れると考える。言い換えれば英語は空の再帰代名詞 (covert reflexive) を許すということである。その根拠として (14) と平行的なオランダ語を考えることができる。

- (15) George wast zich/zichzelf  
George washes refl/refl-self (Koster 1991: 3, 9)

この例では弱形の *zich* と強形の *zichself* が現れており、これはちょうど (14) の *refl* と *himself* にそれぞれ対応している。

実際この他の印欧語でも *zich* のような弱形の再帰代名詞がこの種の動詞に対して使われる。次はドイツ語、イタリア語、フランス語の例である。

- (16) a. Er wäscht sich  
He washes refl
- b. Maria si lavò  
Maria self washed (cf. Manzini 1991: 222)
- c. Il se lave  
he refl washes  
'He washes himself' (Koster 1987: 320)

こうして見てみると英語に *himself* という強形しか再帰代名詞がないのが特殊であるように思われる。英語は弱形の代わりにゼロの形、*refl* を持つというここでの提案は、このような対照的な観点から支持されるものと考ええる。

ここでもう 1 つ注意しておくべき点は、(15) と (16a, b, c) にあげた言語では再帰代名詞の種類が 2 つに分かれるということである。(15), (16a) のゲルマン系のオランダ語、ドイツ語では弱形の *zich* 及び *sich* が動詞の後ろの位置、すなわち目的語の位置に現れているのに対し、(16b), (16c) のラテン系のイタリア語、フランス語では動詞の前に現れている。またこの 2 種類は複合時制における助動詞の選択についても違いを示す。

- (17) a. Er hat sich gewaschen.  
he has refl washed
- b. Je me suis lavé(e). (佐藤 他 1991: 231)  
I me [refl] am washed  
'I (have) washed myself'

ドイツ語 (17a) では *haben* が完了の助動詞として現れ、*sein* をとらないことから動詞 *waschen* は他動詞的であり、再帰代名詞 *sich* はその目的語として働いていると言える。これに対し、フランス語の (17b) では *suis* (<*etre*) が現れ、*avoir* をとらないので、*me* は、再帰代名詞として他動詞の目的語になっているというより、接語 (clitic) として動詞の中に編入 (incorporate) され、動詞が自動詞化していると言うべきかもしれない。英語においてはこのような助動詞の選択が存在しないため、どちらの類に属するかをこの方法で判断することはできない。しかし言語の系統から言って、ゲルマン系に属するので、ここでは (14) のように音形のない再帰代名詞を動詞の後に仮定する。もちろん音形がないわけであるから、ラテン系の接語を動詞の前に仮定しても実質的には違いがない。Langacker (1991: 367f) も、独立型の再帰代名詞を *nominal*、接語型の再帰代名詞を *relational* と呼んでいるが、両者に違いはないと述べている。<sup>1</sup>

さて、上で他の印欧語の弱形の再帰代名詞が英語ではゼロの再帰代名詞に対応するということを述べたが、では英語の再帰代名詞 *-self* に当たるものは他の

言語ではどうなっているのかを簡単に見ておくことにしよう。例えばイタリア語では弱形の (18a) とは別に (19b) の強形がある。

- (18) a. Gianni si ama.  
Gianni refl loves  
b. Gianni ama se stesso.  
Gianni loves himself (Koster 1991: 5)

ドイツ語でも (16a) の弱形に selbst をつけた形が強意の場合などに用いられる。

- (19) a. Er kennt sich selbst sehr genau.  
he knows refl self very right  
b. Er denkt nur an sich selbst.  
he thinks only about refl self (在間 1992: 131)

さらに興味深いのは次のオランダ語の例で動詞及び述語によって弱形、強形のどちらの再帰代名詞をとるかが変わってくるという事実である。

- (20) a. George schaamt zich/\*zichzelf.  
George shames refl/refl-self  
b. George bewondert \*zich/zichzelf.  
George admires refl/refl-self  
c. George praat over \*zich/zichzelf.  
George talks about refl/refl-self  
d. George wast zich/zichzelf.  
George washes refl/refl-self (Koster 1991: 3)

これは述語の意味内容と強調及び言語の経済性という点から説明できると思われる。すなわち (20a) の「恥じる」であれば、自分のことであるのが普通であり、わざわざ「自分自身」に当たる zichzelf という長い形を使う必要はない。(20b), (20c) の「尊敬する」、「について話す」であれば普通は他の人が予想されるので、目的語が自分である場合には、強意的な有標の形 zichzelf を使う必要があると言えよう。(20d) の「洗う」については Koster は両方を容認可能と

しており、自分も他人も目的語としては可能であるということになる。<sup>2</sup>

さてこれまで動詞の目的語として英語では再帰代名詞が音形なしで現れうることを述べてきたが、ここでもう1つ別の音形のない目的語について触れておく必要がある。英語では目的語の代名詞も省略されることがある。

- (21) a. I've written to thank them.  
b. She said she didn't smoke or drink. (Cobuild)

(21a) では a letter、(21b) では a cigarette と alcohol がそれぞれ目的語であると解される。ここではこれらの空の目的語を *pro* (pronoun) とあらわすことにすると、(21a), (21b) は次のように書くことができる (cf. Rizzi 1986)。

- (22) a. I've written *pro* to thank them.  
b. She said she didn't smoke *pro* or drink *pro*. (cf. Rizzi 1986)

これらの例で *pro* はもちろん主語の名詞句 I, she と同一指示ではないので、(14) のような空の再帰代名詞 *refl* とは区別しなければならない。この点で *pro* も *refl* も Chomsky (1981, 1986) の言う束縛理論 (Binding Theory) に従っていることは明らかであろう。

以上この節では、英語では動作主が主語となっている構文において空の再帰代名詞が存在することを述べた。

#### 4. 動作主以外が主語の場合

他動詞文の典型的な主語は前節で見たような動作主 (agent) であると考えられるが、今度は動作主性 (agentivity) が低い主語の場合の再帰代名詞の出没について『ジーニアス英和辞典』の例を見てみよう。まず次の2つの例は、人間以外の生物、動物と植物が主語になっている。



- (23) a. The cobra coiled (itself) up  
b. Ivy wreathes (itself) around the branch.

このどちらの主語も意志 (volition) があるとは考えにくいので動作主性は人間が主語の場合と比べて低いと言える。また次の例も人間に関係があるが、人間そのものが主語ではない。

- (24) a. The car banged (itself) against a tree.  
b. Her anger showed (itself) in her eyes.

主語は (24a) では人の乗った車であり、(24b) では人のもつ怒りという感情である。どちらも主語自体を動作主とすることはむずかしいと思われる。さらに無生物が主語の例でも再帰代名詞が出没する。

- (25) a. Snow dissolves (itself) into water.  
b. The Amazon discharges (itself) into the Atlantic.

次の例も同様であるが、インフォーマントによれば再帰代名詞が通常現れる。

- (26) a. History repeats ?(itself).  
b. Good luck doesn't repeat ?(itself).

(25)、(26)の例は主語が無生物なので動作主とは普通考えられない。ただ、無生物の擬人化 (personification) という考え方も可能である。その点で次の例の判断も興味深い。

- (27) a. ?The door opened itself.  
b. The door opened (by itself).

(27a) は the door が擬人化されているのか、それとも風などの動作主が隠れているのか、どちらと考えるべきなのかむずかしい。また時制は過去になっており、1つの出来事 (event) を述べているということはあるが、次に述べる再帰

的中間態にも通じるものが感じられる。この点についてはまた次の節で論じることにする。

さてこのような動作主性の低い主語を持つ文をドイツ語でも見ておこう。次の(28a)は英語の(25a)に対応する文であるが、ここでも弱い再帰代名詞が現れる。

- (28) a. Salz löst sich in Wasser.  
           salt melts refl in water (在間 1992: 133)
- b. Die Blüte öffnet sich.  
           the flower opens refl

(28b)は(27a)のopenと対応する動詞の例だが、この場合はドイツ語でも再帰代名詞が現れないことがある。

- (29) Die Tür öffnet und schließt automatisch.  
           the door opens and closes automatically

ドイツ語では1回の出来事を述べる文ではsichが現れ、主語の性質を述べる文ではsichは現れないと考えられているようである。<sup>3</sup>ここで見た英語の例でも(25)、(26)は現在時制であり、主語の性質を述べている。このことは次に論じる中間態についても言えることであり、関係があると考えられる。この点についても次節以降で論じることにする。

## 5. 再帰的中間態

英語には中間態(middle)もしくは能動受動態(activo-passive)と呼ばれる構文がある。

- (30) a. Those dresses sell easily.  
b. Rolls Royces drive easily.  
c. These clothes wash easily.

これは動詞の目的語に見える名詞句が主語位置に現れるという点で注目される構文である。そしてこの構文の目的語位置に再帰代名詞が現れることがある。

- (31) a. Those dresses (practically) sell themselves.  
b. Rolls Royces (practically) drive themselves.  
c. These clothes (practically) wash themselves.

(Lakoff 1977: 251f.)

この構文は普通の間接態と意味はほぼ同じであるが、この再帰代名詞は音調の核 (nucleus) を持っていなければならないことを Fellbaum (1989) が指摘している。

- (32) a. This car sells well.  
b. This car sells itSELF.  
c. \*This car SELLS itself.

Fellbaum はこの構文を再帰的間接態 (reflexive middle) と呼び、次のそれぞれの (b) のような例もその中に含めている。

- (33) a. This gate opens/shuts easily.  
b. This gate opens/shuts itSELF. (Fellbaum 1989: 124)
- (34) a. The door closes easily.  
b. This door closes ITSELF. (Fellbaum 1989: 129)

(33)、(34) はいわゆる能格動詞 (ergative verb) であり、前節で見た (27) の例と重なってくる。また次の (b) の文は、(a) の間接態の意味を持たないため、Fellbaum は再帰的間接態とは考えず、単なる強調的な再帰代名詞と考えてい

る。

- (35) a. Bureaucrats bribe easily.  
b. Bureaucrats bribe THEMSELVES. (Fellbaum 1989: 128)

この例では bureaucrats が動作主の読みとなるからであろう。

さてここで、再帰的中間態の再帰代名詞は本当に動詞の目的語なのかという疑問がおこるかもしれない。実際、再帰的中間態では難易の副詞は共起しない。

- (36) a. \*Those dresses (practically) sell themselves easily.  
b. \*Rolls Royces (practically) drive themselves easily.  
c. \*These clothes (practically) wash themselves easily.  
(Lakoff 1977: 252)

また再帰的中間態は普通の中間態に比べて制限が厳しいという特徴もある。

- (37) a. This scotch drinks easily (well).  
b. \*This scotch (practically) drinks itself.  
(38) a. My bicycle rides easily (well).  
b. \*My bicycle practically rides itself.  
(39) a. My dissertation reads easily (well).  
b. \*My dissertation practically reads itself. (ibid.)

Fiengo (1980) は (36) と同様の例を挙げて、この構文の再帰代名詞は副詞だとしている。しかしここでは Fellbaum (1989) に従って再帰代名詞を目的語と考えておきたい。その 1 つの根拠として次のような例が存在することがあげられる。

- (40) a. The Daily Mail that year was selling two million copies a day. (Cobuild)  
b. He also owns the daily *London Sun*, which sells almost 4 million every morning. (小西 1985: 1358)

(40b) では sell の後ろの位置に almost 4 million という数が来ていて、名詞の副詞的用法とも言えそうであるが、(40a) では two million copies と、copies という実体を指す名詞がはっきりと現れており、やはりこれは sell の目的語と考えるべきであろう。とすれば、この two million copies は The Daily Mail の分身とも言うべき、再帰代名詞に近い名詞句である。よって (32b) のような再帰的中間態の再帰代名詞もやはり動詞の目的語と言うことは可能であろう。

そしてもう 1 つの根拠は、他の印欧語では英語の中間態に相当する表現で弱形の再帰代名詞が現れるという事実である。

- (41) a. Das Buch verkauft sich gut.  
this book sells refl well (在間 1992: 133f.)  
b. Ce livre se lit rapidement.  
this book refl reads rapidly (佐藤 他 1991: 240f.)  
c. Questo libro si legge volentieri da tutti.  
this book refl reads gladly by all (坂本 1979: 197)  
d. Это книга хорошо продаётся.  
this book well sell-self

ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語のそれぞれに再帰代名詞に相当するものがあらわれている。このことから英語の再帰的中間態でもこれらの言語と同じく、再帰代名詞が他動詞の目的語として働いていると考えることは可能であろう。<sup>4</sup>

またさらに (41) の例で弱形の再帰代名詞が現れることを考えると、3 節で見た他言語の弱形再帰代名詞と英語の空の再帰代名詞との平行性から、英語の中間態でも他動詞の目的語に空の再帰代名詞が存在するという分析ができると

思われる。すなわち例えば (30) の中間態は次のような構造をしていると考えられる。

- (42) a. Those dresses sell *refl* easily.  
b. Rolls Royces drive *refl* easily.  
c. These clothes wash *refl* easily.

すなわち中間態は再帰的中間態の再帰代名詞が空の形になっていると考えることになる。

ここで目的語が、被動作主 (patient) である物の再帰代名詞だとすれば、主語にはその物自体が動作主として出てきているのか、それとも隠れた動作主が別に存在するのかという疑問が出てくる。しかしこの主語と動作主の問題については後に 8 節で詳しく論じることにする。

## 6. 再帰的使役構文・結果構文

再帰代名詞が出没するもう一つの場合は使役動詞の目的語の位置である。まず、make の場合から見よう。

- (43) a. They made (themselves) ready to fight. (Kenkyusha)  
b. He will make (?himself) a fine teacher.  
c. You should make (\*yourself) sure of the facts before you write something. (Genius)

(43a) は古い言い方ではあるが再帰代名詞が出ても出なくても良い。インフォーマントによれば (43b) は himself を入れない方が自然であり、(43c) は実際には yourself が現れることはない。しかし 'I am sure.' という表現からわかるように make sure の make の目的語であり (be) sure の主語であるのは make の主語である you であり、この位置では yourself となるはずである。<sup>5</sup>

次に let の場合を考えてみよう。慣用的表現の中で再帰代名詞が出没するも

のがある。

- (44) a. He couldn't really let go.  
b. He easily lets himself go on that subject.  
c. I don't want to let myself go.

(44a) は「羽目をはずす」、(44b) は「我を忘れる」、(44c) は「自墮落にする」という意味であるが基本は「自分を行かせる」であり、変わらない。

これらの使役動詞とは異なるが、結果構文 (resultative) においても再帰代名詞が出没することがある。

- (45) a. He rubbed ??(himself) dry. (Halliday 1967: 79)  
b. He washed ?(himself) clean. (attested)

(45a) の文を Halliday は himself なしで提示しているが、インフォーマントによれば、一般には himself が必要とされる。(45b) の wash の場合の方が再帰代名詞の省略可能性が高く、実際にも次のような例がある。

- (46) He washed (his face) clean before coming downstairs.  
(小西 1985: 1713f.)

(45a) の rub や (45b)、(46) の wash は 3 節で見たようにもともと他動詞であり、目的語として再帰代名詞をとる。また物が主語の結果構文でも再帰代名詞が出没する。

- (47) a. The screw have worked (itself) free.  
b. Tiles on the roof work loose with age.

これは 4 節の動作主以外の主語の場合と同じであり、この場合には結果を表す補語がついている。

これらの例は他動詞用法を持つ動詞の場合であったが、自動詞用法のみの動詞が再帰代名詞を後ろにとることがある。

- (48) a. The lecturer talked herself hoarse.  
 b. The girl cried herself to sleep. (影山 1996: 260f.)

しかしこのような見かけ上の再帰目的語 (fake reflexive) は省略できない。

- (49) a. \*The lecturer talked hoarse.  
 b. \*The girl cried to sleep. (ibid.)

これは自動詞の後が結果の状態を表す小節 (small clause) になっており、動作とそれによって生じる結果の状態を同時に表現するので、小節として主語と述語を明示する必要があるためと考えられる。ドイツ語でも同様の表現は再帰代名詞を必要とする。

- (50) Er arbeitet sich müde. (在間 1992: 135)  
 he works refl tired

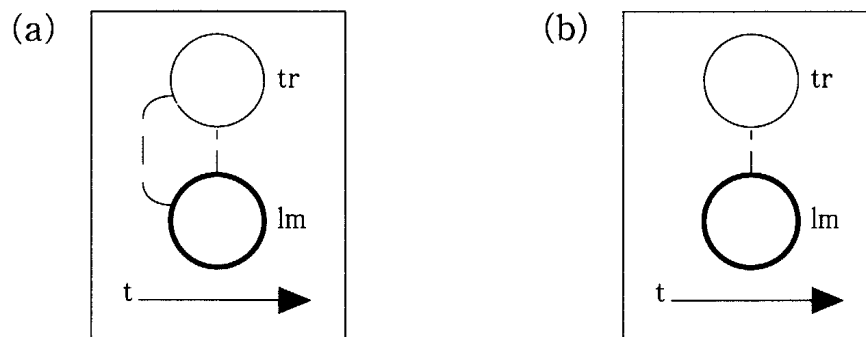
## 7. 再帰代名詞の形態、機能と歴史

これまで再帰代名詞が出没する構文を、(i) 動作主主語構文、(ii) 非動作主主語構文、(iii) (再帰的)中間態構文、(iv) 再帰的使役構文と見てきた。そして英語以外の印欧語では弱形の再帰代名詞がそれぞれに現れることを指摘した。しかしなぜ英語では音形をもって現れない、空の再帰代名詞が存在するのかという基本的な疑問がおこる。そこでこの節ではまず再帰代名詞の形態と機能について考え、次に英語史の観点から再帰代名詞の出没について考えることにする。

ではまず再帰代名詞はどのような働きをしているのかを考えてみよう。手がかりとして van Hoek (1992: 323) が示している再帰代名詞のプロトタイプ (reflexive prototype) の図を見してみる (cf. Langacker 1991: 369)。



(51) reflexive prototype



(51a) では動作主が trajector、被動作主が landmark、動作が直線の点線で表されているが、この場合は再帰代名詞が landmark となっており、trajector と同一であることが曲線の点線で表されている。すなわち、普通その他動詞構文であれば、(51b) のように動作主が自分とは別の被動作主に動作をするということになるが、再帰代名詞はこの被動作主が動作主と同一であるという点で有標 (marked) であると考えられる。

この再帰代名詞の有標性は形態にも表れる。例えばドイツ語では、次に示すように、1, 2 人称の再帰代名詞は普通の人称代名詞と同形である。

(52)	1pers.	2pers.	3pers.
dat. sg.	mir	dir	sich
acc. sg.	mich	dich	sich
dat/acc.pl.	uns	euch	sich

これは 1, 2 人称の場合、「私が私を～する」「あなたがあなたを～する」と言えば再帰的となり、曖昧さが生じないので、無標の人称代名詞形を使うと考えられる。しかし 3 人称の場合は人称代名詞を使った場合「ある人が同じ人に～する」のか「ある人が別の人に～する」のか曖昧になるため、再帰代名詞として sich という、人称代名詞と異なる有標の形を使うことになる。

では英語の場合はどうであろうか。まず事実は次の (53) である。

(53)	1pers.	2pers.	3pers.
	sg. myself	yourself/thyself	himself/herself/itself/oneself
	pl. ourselves	yourselves	themselves

英語ではすべての場合に -self/selves という形態を人称代名詞に付けている。この-self/selves は後述するようにもともとは「同じ」を意味する形容詞であった。そして注目すべきなのは 1, 2 人称では人称代名詞の所有格に、3 人称では与格、対格に付いているということである。(53) は標準英語の場合であり、次の (54) に示すように、方言では 1, 2 人称にも与格、対格が使われたり、3 人称でも所有格が使われたりしている。

(54)	1pers.	2pers.	3pers.
	sg. my-sen/-sell	thysel/thissen	hissel
	me-self/-sel (l)	theesel/theesen	
	pl. us-selves/-sen		theirselves

(Wales 1996: 185)

これらの事実を理解するためには、やはり英語の歴史を考える必要がある。ここで簡単に再帰代名詞の歴史をふり返ってみよう。

古英語でもドイツ語 (52) の 1, 2 人称の場合と同様に、人称代名詞を再帰的な場合にも使っていた。

- (55) a. Abraham ferde him ham  
           ‘Abraham went home’  
       b. He wæs hine trymmende  
           ‘He prepared himself’ (中尾 1979: 167f.)

中英語の時代でもこの用法は続き、例えば Shakespeare にも例が見られる (cf. Jespersen 1949: 164)。

- (56) a. there will she hide her (Ado III. 1.11)  
 b. prepare you (Hml III. 3.2)

その一方で人称代名詞の後に「同じ」の意の形容詞 self を加える用法も発達し、さらに人称代名詞自体の形態も 1, 2 人称では me self, thee self という与格・対格の形から my self, thy self という所有格の形へと変わっていった。この変化の理由としては、いくつかの可能性が考えられている (cf. 安井 1960: 110f)。一つは次の (57a) に示すように音の弱化により、(57b) のような所有格の形に移行したとする説である。

- (57) a. me > mæ > mi, θe > θə > θi  
 b. myself, thyself

また herself が所有格と与格・対格の形が同じであるため、所有格と考えられるようになり herself からの類推で他の形も所有格になったとする説もある。さらにこの 2 つの説にプラスして考えるべきなのは (58) に示すような品詞と構造の変化である。

- (58)      pron self > pron self  
              N    Adj    N(g)    N

すなわち、最初は「同じ」の意の形容詞であった self が「自身」の意の名詞と考えられるようになり、それに伴って前の名詞が self を修飾するようになったということである。これは名詞句の主要部 (head) が代名詞の部分から -self の部分へと移ったということである。

このようなこれまでの説は確かに再帰代名詞の形態についてある程度の説明を与えてくれるが、ではなぜ 1, 2 人称では所有格になり、3 人称では与格・対格の形のまま残ったのかという疑問については答えを与えてくれない。音の弱化説では、1, 2 人称複数形の ourselves, yourself と 3 人称の形を区別できないし、herself からの類推説も、一番近い himself がなぜ hisself とはならな

かったのかを説明できない。

ここでは一つの可能性として、ドイツ語(52)との平行性を考えてみたい。すなわち、元来人称代名詞ですませていた目的語に、区別の必要から「同じ」の意の self をつけるようになった。そしてこの self が名詞として感じられるようになり、1, 2 人称では曖昧さが生じないこともあって人称代名詞の部分は所有格になって self を修飾するようになった。しかし3人称の self はあくまでも区別の必要から「同じ」を意味する形容詞性を強く持っていたため、それ自体が名詞としては意識されず、その前の人称代名詞があくまでも主要部 (head) の名詞と考えられた。よって動詞・述語の目的語の主要部は1, 2 人称では self の部分であるのに対し、3 人称では人称代名詞の部分となるため、格は与格・対格のままで残ったという仮説である。もちろんこれはあくまで1つの可能性であり、裏付けのない案にすぎない。しかし英語で1, 2 人称と3 人称で人称代名詞の部分の格が異なるという事実は、やはり音変化や類推ではなく、人称の違いによると考えるのが妥当なのではないだろうか。

さて本題に戻って、再帰代名詞の出没について見てみよう。英語ではドイツ語の sich のような弱い再帰詞が出現せず、-self 付加による強形しか現れなかった。その結果、強形を使えば文が長くなり、言葉の経済性という点では難があったためか、再帰代名詞を省略するようになったと考えられる。これはここで述べているように空の再帰代名詞を使うようになった言ってもかまわない。いずれにせよ、oversleep myself は方言にのみ残っており、oversleep と一語で言うのが標準であることからわかるように、英語は再帰代名詞を表さない方向に発展したのである。wash、dress、shave などの動詞は、他動詞が自動詞化したということもでき、実際、再帰代名詞を用いない自動詞用法が普通という状況である (cf. *Genius*)。

## 8. 主語の機能

さてこれまで目的語再帰代名詞の出没について見てきたわけであるが、ここ

で主語の機能について考えてみよう。まず手がかりとして Halliday (1970: 159) の述べている主語の3つの機能を見てみる。

- [illegible]

Halliday は Sweet を引きながら、(59a) の主語 my mother は論理的主語、文法的主語、心理的主語の 3 つの機能を同時に果たしていると述べている。そしてこれらの機能を分散させたのが (59b) の例である。Halliday はまたもう 1 つの例でこれらの機能を自分の用語に言い換えて示している。

- [illegible]

(Halliday 1970: 165)

動作主 (actor)、法的主語 (modal subject)、主題 (theme) はそれぞれ (59) の論理主語、文法的主語、心理的主語に相当する。用語は何であれ、ここで能動文の主語は文法的主語の他に動作主と主題という 2 つの機能を果たしているとした点は注目に値する。この考え方はこれまで見てきた再帰代名詞の出没についても良い見通しを与えてくれるからである。次の、やはり Halliday のあげる例は興味深い。

- (61) Children don't wash. (Halliday 1967: 49)

(61) は次の 3 通りの解釈を持つと Halliday は述べている。

- (62) a. Children find it difficult to wash themselves.  
b. Children find it difficult to wash things.  
c. It is difficult to wash children.

この 3 つの解釈はこれまで述べてきた空の代名詞 *pro* と再帰代名詞 *refl* を用いればそれぞれ次のように表せるだろう。

- (63) a. Children(ag) don't wash *refl*  
b. Children(ag) don't wash *pro*  
c. Children(top) *pro*(ag) don't wash *refl*

まず、*pro* を含む (63b) から見ると、この構造で主語の children は wash の動作主 (ag) であり、wash の目的語である *pro* は主語以外の人、物を指すことになるが、この場合は意味解釈としては洗われる物一般 (things) を指すことになる。よって意味は「子供は (物を) 洗えない」となる。そして (63a) は、主語が children で動作主である点は (63b) と同じであるが、wash の目的語は *refl* であり主語自身ということになる。よって「子供は (体／自分を) 洗えない」という解釈になる。問題は (62c) の中間態としての解釈「子供は (親がなかなか) 洗えない」であるが、ここでは (63c) の構造を持つと考える。すなわち wash の目的語が children である点は (63a) と同じであるが、wash の動作主は (62c) では children 以外の人 (例えば親) であって (62a) のように children 自身ではない。これを (63c) では空の代名詞 *pro*(ag) で表わしている。<sup>6</sup> それでは主語位置に明示的に現れている children は何の機能を果たしているのかということになる。これまでの議論からこれは文の主題 (theme) もしくは話題 (topic) と考えることができるだろう。Halliday の言う意味での theme である。そして (63c) の *pro*(ag) は Halliday ならば actor ということになる。では Halliday

の modal subject もしくは grammatical subject は何か。表面に主語として出ている children であって、これが述部との（数の）一致をおこなっているのである。すなわち (63c) では children が話題と文法的主語の 2 つの働きをしており、動作主は、空の主語として顕在化していない *pro* であるということになる。そしてもう 1 つ重要な点は (63c) では wash という動作を受けるのは表面上の文法的主語 children と同一の空の目的語であり、主語と同一なので *pro* でなく空の再帰代名詞 *refl* となることである。すなわち英語の中間態は上で見たドイツ語の (41a) と同じ構造をしていることになる。(41a) とそれに対応する英語の中間態の構造を次に示す。

- (64) a. Das Buch(top) *pro*(ag) verkauft sich gut.  
b. This book(top) *pro*(ag) sells *refl* well.

英語の中間態構文については Keyser and Roeper (1984) は抽象的な接語 *si* が動詞に付くことによって目的語の格 accusative case と外項の  $\theta$  役割が吸収されるために目的語 (this book) が主語位置に移動すると考えている。これは受動態と同じ派生であるが、ここでの分析は、これとは、主題を置く点、別の動作主を空の代名詞とする点、さらに動詞の目的語を主題の名詞句と同一の空の再帰代名詞とする点、移動を仮定しない点で異なっている。<sup>7</sup>

さてここで、中間態構文の主語は動作主ではないのに被動作主である目的語が再帰形だとするのは不自然だという反論も考えられる。しかし再帰形は必ずしも動作主の意味的な目的語に限られるわけではない。上で見たように例えば英語、ドイツ語共通に次のような見かけ上の再帰目的語 (fake reflexive) が存在する (cf. 影山 1996)。

- (65) a. He worked himself to death.  
b. Er arbeitet sich müde. (在 間 1992: 135)  
he works *refl* tired

これらにおいて再帰形は自動詞の被動作主目的語ではありえない。しかし目的

語と同じ位置にあることによって主語の再帰代名詞として目的語らしくふるまっていると考えられる (cf. Goldberg 1995)。このように再帰代名詞は本来の再帰的意味の他動詞構文以外でも現れるので、中間態において、主題の名詞と同一指示の空の再帰代名詞を目的語位置に仮定することは不自然ではないと考える。

さて、これまで見てきた再帰代名詞が出没する構文について、主語の機能という点からまとめておくことにしよう。動作主を主語にとる構文、動作主でない主語をとる構文、そして中間態構文の3つについて、それぞれの主題と動作主は何かを表の形で整理してみれば次のようになるだろう。

		<u>topic</u>	<u>agent (or causer)</u>
(66)	a. John washed himself	John	John/*agent
	b. John washed <i>refl</i>	John	John/*agent
(67)	a. Snow dissolves itself into water	snow	snow/?causer
	b. Snow dissolves <i>refl</i> into water	snow	?snow/causer
(68)	a. This book sells itself	this book	this book/?agent
	b. This book sells <i>refl</i> well	this book	*this book/agent

これらすべてで、文法的主語と主題とは文の主語であり、これは同じである。しかし、動作主（もしくは物の場合は causer）は、(66) では文の主語であって別の動作主がいるわけではない。(67) は、再帰代名詞が現れる (67a) では典型的な他動詞文の構造に近くなるためか、主語の snow 自体が causer である印象が強く、別の causer（例えば熱など）の存在を含意しないように思われる。これに対して (67b) の再帰代名詞が空の場合は、表面的に自動詞構文になっている分だけ、別の causer の存在を含意しやすいように思われる。また (68) の中間態でも、再帰詞が現れる (68a) では意味的には別な agent がいるはずであるが、主語の this book があたかも agent もしくは causer であって自分を売っているような印象を受ける。これも他動詞構造の持つ構造的な意味と言えるかもしれない。そして普通の中間態 (68b) では this book は動作主とは考えにく



く、あくまでも主題であり、別な agent がいると考えるべきであろう。こうした違いをもう一度、主語の動作主性を別な動作主の存在を含意するかどうかという点で整理してみれば、次のようになる。

		agentivity of 'subject'	covert agent (or causer)
(69)	a. John washed himself	+	—
	b. John washed <i>refl</i>	+	—
(70)	a. Snow dissolves itself into water	±	±
	b. Snow dissolves <i>refl</i> into water	±	±
(71)	a. This book sells itself	±	±
	b. This book sells <i>refl</i> well	—	+

すなわち文法的主語の動作主性がこれらの構文では少しずつ異なっており、それに伴って別な動作主の存在を含意する可能性も反比例のように変化するということである。

## 9. まとめ

以上、再帰代名詞が出没するいくつかの構文について、実例を観察し、他言語と対照することによって英語では空の再帰代名詞が存在するという考えを述べた。また再帰代名詞の形態と歴史について考察し、主語の機能という観点からこれらの構文の特性について考察した。特に中間態構文については空の再帰詞を目的語位置に仮定する新しい分析を提案した。

ただし、ここで言う空の再帰代名詞というのは理論上、説明上仮定するものであって、それが実在するかしないかを討議すべきものではないと考える。これを仮定せず単に他動詞の自動詞用法と言うこともできるであろうが、ここでの議論は他動詞はあくまで他動詞であるという考えに基づいている。いずれにせよ、構文それぞれの意味の特性、特に中間態構文の状態性などについては全く触れる余裕がなかった。また英語及び他言語のデータも不十分であり、まだ

まだ研究の余地は多く残っている。これらの問題についてはまた別な機会に論じることにはしたい。

注

\* 本稿は第 17 回認知機能言語学談話会(1997 年 2 月 19 日、北海道大学文学部)において発表した内容をまとめたものである。英文法の研究へ進むきっかけを作って下さった松田卓先生に心からの感謝を申し述べたい。また準備の段階で葛西清蔵先生、景山弘幸氏、奥聡氏、芸林民夫氏、William Green 氏から貴重なご意見をいただいた。談話会では高橋英光先生、清水誠先生、町田健先生、Joseph Tomei 氏、北海道大学大学院の方々から有益なコメントをいただいた。オランダ語については Elisabeth de Borer さんの協力を得た。

<sup>1</sup> ここでの仮定とは反対に Keyser and Roeper (1984) は英語の中間態 (middle) に抽象的な接語の *si* を仮定している。この問題については時崎 (近刊) で論じることにする。

<sup>2</sup> 清水誠氏によれば、(20d) では *zich* の方が *zichzelf* より自然であるとのことであり、どちらかと言えば「洗う」のは自分の体の方が普通であるという直感と一致する。

<sup>3</sup> これも清水誠氏による。

<sup>4</sup> ドイツ語には非人称中間態 (impersonal middles) と呼ばれる構文も存在する。

(i) a. In diesem Bett schläft es sich schön.  
in this bed sleep it refl well

b. Mit dieser Kanne gießt es sich schlecht. (在間 1992: 134)  
with this pot pour it refl badly

この構文は次の非人称受動態とも関連があるがここでは論じない。

(ii) Hier wird getanzt. (在間 1992: 80)  
here be dance-en

<sup>5</sup> この他に *make believe* という成句もあるが、この場合は *refl* の時と *pro* の

時があると思われる。

- (i) a. Let's make *refl* believe we are pirates
- b. She made *pro* believe not to hear me.

<sup>6</sup> ここで *pro* を PRO としても議論は変わらない。Stroik (1992) を参照。

<sup>7</sup> この分析については時崎（近刊）で詳しく論じることにする。

### References

- Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on government and binding*, Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam. 1986. *Knowledge of language*, New York: Praeger.
- Fellbaum, Christiane. 1989 "On the 'reflexive middles' in English," CLS 25/1, 123-132.
- Fiengo, Robert. 1980. *Surface structure: The interface of the autonomous components*, Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A construction grammar approach to argument structure*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Halliday, M. A. K. 1967. "Notes on transitivity and theme in English, Part 1," *Journal of Linguistics* 3, 37-81.
- Halliday, M. A. K. 1970. "Language structure and language function," in John Lyons (ed.) *New horizons in linguistics 1*, Harmondsworth: Penguin, 140-165.
- van Hoek, Karen Ann. 1992. *Paths through conceptual structure: constraints on pronominal anaphora*, Doctoral dissertation, University of California, San Diego.
- Jespersen, Otto. 1949. *A modern English grammar on historical principles: part VII syntax*, London: George Allen & Unwin.
- 影山太郎. 1996. 『動詞意味論』東京：くろしお出版.
- Keyser, Samuel Jay and Thomas Roeper. 1984. "On the middle and ergative

- constructions in English,” *Linguistic Inquiry* 15: 3, 381-416.
- 小西友七 (編). 1985. 『英語基本動詞辞典』 東京：研究社出版.
- Koster, Jan. 1987. *Domains and dynasties: The radical autonomy of syntax*, Dordrecht: Foris.
- Koster, Jan. 1991. “Recent developments in the theory of anaphora,” hand-out of the talk given at Tsuda College and Kyoto University on November 21 and 22.
- Lakoff, George. 1977. “Linguistic Gestalts,” *CLS* 13, 236-287.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of cognitive grammar vol.2, Descriptive application*, Stanford: Stanford University Press.
- Manzini, Rita M. 1991. “Locality, parameters and some issues in Italian syntax,” in Koster and Reuland, ed. *Long-distance anaphora*, Cambridge, Cambridge University Press. 209-229.
- 中尾俊夫. 1979. 『英語発達史』 (*A Linguistic History of the English Language*) 東京：篠崎書林.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. 1985. *A comprehensive grammar of the English language*, London: Longman.
- Rizzi, Luigi. 1986. “Null objects in Italian and the theory of *pro*,” *Linguistic Inquiry* 17: 3, 501-557.
- 坂本鉄男. 1979. 『現代イタリア文法』 東京：白水社.
- 佐藤房吉, 大木健, 佐藤正明. 1991. 『詳解フランス文典』 東京：駿河台出版社.
- Stroik, Thomas. 1992. “Middles and movement,” *Linguistic Inquiry* 23: 1, 127-137.
- 時崎久夫. 近刊. 「再帰代名詞と中間態構文」.
- Wales, Katie. 1996. *Personal pronouns in present-day English*, Cambridge University Press.
- 安井稔. 1960. 『英語学研究』 東京：研究社.
- 在間進. 1992. 『〈詳解〉ドイツ語文法』 東京：大修館.

**辞書**

Collins Cobuild English Language Dictionary. 1987. London: Collins.

小稲義男（編）. 1980. 『新英和大辞典 第5版』東京：研究社.

小西友七（編）. 1994. 『ジーニアス英和辞典〈改訂版〉』東京：大修館.